

月例研究発表要旨

第 218 回 2004 年 5 月 26 日

「村上春樹の想像力

——因果はめぐる風車」

井上義夫

村上春樹が作品を書くとき、その想像力がどんな経路を辿っているかを跡付ける。

彼の長編小説の主要な作中人物を検討すると「はじめに直子ありき」といわざるを得ない。処女作『風の歌を聴け』の「僕が寝た三番目の女の子」がその女性である。

三人目の相手は大学の図書館で知り合った仏文科の女子学生だったが、彼女は翌年の春休みにテニス・コートのわきにあるみずぼらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた。(断章 19)

その容貌の特徴は「断章 26」でやや詳しく述べられるが、「自分でカットしたらしい前髪は無造作に広い額に落ちかかり」を、「僕が寝た三番目の女の子」の特徴として指摘することができる。この女性は謂わば最初から死んでいるのであり、第 2 作の『1973 年のピンボール』は、「直子」という名で登場するこの死者の思い出と語り手によるその探索に当てられる。

第 3 作『羊をめぐる冒険』で最初に登場するのは「誰とでも寝る女の子」であるが、この女性も「直子」にほかならないことは、「図書館」および娼婦性が彼女を特徴付け

ることから理解できる。

(「直子」が娼婦と関連付けられる経緯については「5 月の海岸線」(『カンガルー日和』所収)により説明する。)

この女性が単に「誰とでも寝る女の子」でなかったことは、「僕」とその妻の会話が示唆している。

「とにかく、誰とでも寝ちゃう女の子だったのね？」

「そうだよ」

「でもあなたとは別だったんでしょ？」

(『羊をめぐる冒険』第二章)

村上春樹の想像力の働きを考える上で興味深いのは、「直子」に相当する女性は、小説のなかで同時に存在することができないということである。「誰とでも寝る女の子」が事故で死んだのちに、初めて「耳のモデル」(キキ)が登場するのはそのためである。この女性もまた「直子」にほかならないことは、彼女が校正係兼高級娼婦であることによって知られる。

(「キキ」が既に死んでしまった幽霊であることを、「まるで生きているみたいでしょ？」等々の彼女の不思議な台詞や場面により説明する。)

『ダンス・ダンス・ダンス』は行方不明になったキキを探索する旅に他ならないが、ここに出現するのが「ユキ」という不思議な名の少女である。この少女もまた「キキ」の生まれ変わりであることは、僕が初めてこの少女に会って胸ときめかす奇妙な場面を検討すれば容易に理解できる。「長い髪が不自然なくらいまっすぐで」云々の人物造型も「直子」のそれと同一である。

『ねじまき鳥クロニクル』の「僕」の妻岡田久美子もまたある日突然失踪する。

僕がクミコについて知っていること
 といえば、彼女が無口で、絵を描くのが好きで、真っ直ぐな綺麗な髪をして、
 右の肩甲骨の上にほくろがふたつある
 ということだけだった。そして彼女に
 として、僕と寝たのが最初の性体験だ
 った。

話をしながらクミコは少し泣いた。
 泣きたくなくなる気持ちは、僕にもよくわ
 かった。僕は彼女を抱き、髪を撫でた。
 という類の文章に照らせば彼女が「直子」
 に他ならないことは歴然としている。そう
 して彼女が失踪して初めて、入れ替わりに
 「加納クレタ」が登場することになるの
 ある。

「クレタ島にはいつか行きたいと私
 は思っています」と彼女は言った。そ
 していかにも真面目そうな顔で頷いた。
 「クレタはアフリカにいちばん近いギ
 リシャの島です。大きな島で、古代文
 明が栄えました。姉のマルタはクレタ
 島にも行ったことがあるのですが、素
 晴らしいところだと言ってます。風が
 強く、蜂蜜がとてもおいしいそうです。
 私は蜂蜜が大好きです」

僕は頷いた。僕は蜂蜜がそれほど好
 きではない。

「本日はひとつお願いがあってここ
 に参りました」と加納クレタは言った。
 「実はお宅の水を採取させていただき
 たいのです」

「水？」と僕は言った。「水道の水の
 ことですか？」

「水道の水で結構です。それからも
 しこの近辺に井戸がありましたら、そ

の水もいただきたいのですが」

彼女が頷くと、カールした髪が六〇
 年代初期的にふわふわと揺れた。

加納クレタは目を閉じて顎を軽く上
 に向け、夢でも見ているように体を静
 かに前後に揺らせていた。ワンピース
 の下の彼女の胸が呼吸にあわせて膨ら
 み、すぼまるのが見えた。前髪が何本
 か落ちて、その額にかかっていた。僕
 は自分が広大な海の真ん中にひとりき
 りで浮かんでいるところを想像した。
 目を閉じ、耳を澄ませ、顔にあたる小
 さな波の音を聞こうとした。僕のから
 だは、生ぬるい海の水にすっぽりと包
 まれていた。ゆっくりと潮が流れてい
 いた。僕はそこに浮かびながら、どこか
 に向けて流されていた。加納クレタの
 言ったとおり、何も考えないことにし
 た。目を閉じ、体の力を抜いて、流れ
 に身をまかせた。

長編最新作『海辺のカフカ』においても、
 驚くべきことに作中の重要な人物「大島さ
 ん」と「佐伯さん」は二人とも「直子」の
 特徴を具えている。

彼は長い削りたての鉛筆を指のあい
 だにはさんだまま、僕の顔をひとしき
 り興味深そうに眺める。消しゴムのつ
 いた黄色い鉛筆だ。小柄な整った顔だ
 ちの青年だった。ハンサムというより
 は、むしろ美しいと言ったほうが近い
 かもしれない。白いコットンのボタン
 ダウンの長袖のシャツを着て、オリ
 ブ・グリーンのチノパンツをはいてい
 る。どちらにもしわひとつない。髪の
 毛は長めで、うつむくと前髪が額に落

ちて、それをときどき思いだしたように手ですくいあげる。シャツの袖が肘のところまで折られていて、ほっそりとした白い手首が見える。細くて繊細なフレームの眼鏡が顔のかたちによく似合っている。胸に「大島」と書かれた小さなプラスチックの札をつけている。彼は僕の知っているどんな図書館員ともちがっている。

やがて佐伯さんはあおむけになった君の身体の上に乗る。(中略)彼女のまっすぐな髪が君の肩の上で、柳の枝のように音もなく揺れる。君は少しずつ柔らかい泥の中に吞みこまれていく。(中略)それでも彼女はまだ眠っている。目を開けたまま眠っている。彼女はべつの世界にいる。君の精液はべつの世界に吞みこまれていく。

彼女はこの部屋に現れてから一度も声を出していない。僕の耳に届くのはかすかな床の軋みと、休みなく吹きつづける風の音だけだ。吐息をつく部屋と、そっと身を震わせるガラス窓。それだけが僕の背後に控えているコロスだ。

これを要するに村上春樹は処女作以来、20年余にわたり、同一の女性を主たる男性の作中人物が深く関わりをもつ人物として設定することなしには創作をなし得なかったということである。それを想像力の貧困と呼ぶか否かはともかく、異様な事態であることは間違いなからう。

第 219 回 2004 年 10 月 20 日

「多文化主義を超えて

——ハーレム・ルネサンスと人種表現」

新田啓子

この発表は、1980 年代終盤より、「差異」をキーワードとした現代文化概念の尖端とされながら、なおも批判に晒され続けている米国多文化主義の問題点をまとめたものである。より具体的には、その文化思潮の人種管理主義的な側面を批判的に考えた上で、次に、それより半世紀前に遡るハーレムルネサンスの時代に練り上げられた黒人文化概念を振り返った。さらにその思想の要諦が、「多文化的人種管理」という狡猾な政治にいかなる応答を示し得るのか、その可能性を考えた。

第 220 回 2004 年 12 月 15 日

「フランス中世の計画都市

バスティードについて」

横張 誠

フランス南西部には、中世に建設されたバスティード bastide と呼ばれる大小の計画都市が 200~500 散在し、その大半にグリッド・プランが確認される。

建物が集落建設当初の形をとどめていることは稀である。しかし多くは計画時の集落の形状を維持し、しかも今日でも通用する快適な居住環境を形成している。

上記のグリッド・プランは、用地の形状に合わせてかなり柔軟に適用されているが、階層化された直交街路がきわめて顕著に認

められることが少なくない。建物のファサードの幅、宅地の規模・形状は各バステード内で均一であり、ある種の平等の原理が見てとれる。多くの場合、建物は、幅が狭く奥行きが長い敷地に、背中合わせに建てられ、それぞれが別の街路にファサードを持つ。背中合わせになった二軒の建物あるいは敷地の間には、狭い通路が通る。本来これは公的なものだったが、なしくずし的に私有化されて、規則性が失われ、さらにはほとんど消滅してしまっただころもある。細長い敷地が規則的に、一定数集まって長方形の区画を形成し、これもそれぞれのバステードで均一性・規則性を示す。防御用の市壁は、建設時につくられなかったバステードが稀ではない。初めは集落の境界線の内側（外側の場合もある）に沿って各家庭用の菜園があった。

バステードが計画都市として注目されるようになったのは、ロマン派による中世再発見よりも少しあとの、19世紀半ばごろである。1854年刊行開始の『中世建築事典』の「建築線 *alignement*」の項目（第I巻）で、ヴィオレ・ル・デュクは、中世にも、直線街路プランを有する計画都市があったとして、モンパジエを例に挙げている。挿入された平面プランが極度に理想化されているのは、著者がまだ現地を見ていなかった証拠と思われる。

バステードは、パレージュ *paréage* 契約によって建設された新都市と定義できよう。パレージュとは、有力領主が保護を与える代わりに、これより力の弱い領主が領地を不分割で提供し、これによる事業から得られる収入を両者が分け合う契約を指す。

バステードのおおよその建設期は、ア

ルビジュワ十字軍の終了（1229年のバリ和約）から百年戦争が起こるまでの約一世紀である。当時フランス南西部は、英仏両王家の領地が複雑に入り組み、バステードは、両勢力の覇権争いの狭間で建設されたのである。それは、軍事的な勢力争いの発現とは限らず、ある種の自由特区を建設し、周辺農民を集めて、政治・経済面で力を誇示しようとする意図の現われでもあった。

集落の建設開始とともに、居住者の身分を規定する慣習法確認状が作成される。住民の自由の拡大を認めたこの規定が魅力となって、入植希望者が集まることになる。

大抵のバステードには、公共広場がある。グリッド・プランが確認されるバステードで一番多く見られるのは四辺形の広場で、四隅に進入路がある。広場は、必ずしも集落の中心にはないが、プラン全体の基準を成している。またそれは、大抵アーケードに囲まれており、四隅の建物は二階から上で、角と角がきわめて近いか、接触していて、閉じた印象を与える。ただし通行を容易にするため、一階レベルで隅切りが施されている例が多い。アーケードは、公共用地に建設されたものらしく、当初の計画にはなかったようだ。

慣習法確認状等の文書から、広場に想定された主な役割は経済活動だったことが判明しており、そこは、商品売買が行われ、市が立ち、定期市（縁日）が催される場だった。現在、大半のバステードで、広場に中央市場が建っている。経済活動の場として計画された広場が、自治体運営の中心としての機能も果たすようになるのは少し後のことである。

広場と教会との位置関係は特徴的で、教会が広場に面しているのは稀であり、両者

を相互に隔離する傾向が認められる。最も一般的なのは、教会が、広場の四隅のひとつに隣接して建てられ、両者間を、直接斜めに行き来できる形である。

街路については、長方形の集落の場合、普通、その長辺方向に走る道が階層の一番上に来る。6～8メートル幅で、かなり広い(当時のパリの街路は7メートル以下)。5～6メートル幅の街路がこれに直行し、背中合わせの建物の間には約2メートル幅の歩行者専用通路がある。隣り合った建物の間には25センチ前後の隙間が設けられていることが多い。

近代フランスの都市観には、モニュメントがつきまといっている。絶対王政期に建設された、パリのヴァンドーム広場やコンコルド広場、19世紀につくられたエトワール広場などは、権力誇示のためのモニュメント的な性格が強い。国民国家の成立期に重なる近代は、国民のアイデンティティーの抛り所として、都市にモニュメントを必要としたのである。政治性の優先である。本来経済機能だけが想定されたバ스티ードの広場は、これへのアンチテーゼとなっている。政治・経済双方の機能が割り当てられ、モニュメント性が要求された古代のアゴラやフォルムとも、これは違うのだ。

また今日フランスの諸都市の広場はロータリー化して、周辺の居住環境の劣化を招いているが、バ스티ードの広場のコンセプトは、この結果を予め批判していたかのようだ。近代技術の発展を推進したのは、交通(交易)重視の経済思想である。これが鉄道建設を促し、鉄と機械の近代文明をつくりあげたのである。ロータリー化を拒絶するバ스티ードの広場は、この近代の機械文明そのものを批判しているかに見え

る。しかし多数のバ스티ードの広場が駐車場に利用されているところを見ると、近代文明も悔れない。

第221回 2005年2月16日

「日本語・教育・コメニウス」

松岡 弘

一橋大学に18年、その前の9年間に東京外国語大学の日本語学校、その前の3年半をウィーン大学日本文化研究所、そして大学卒業直後の10年は財団法人海外技術者研修協会で、一貫して日本語教育に従事してきたが、この間どんなことを考え続け、どんな教え方でこの仕事に当たってきたかを話したい。そして、それを前提に、なぜ最終的にコメニウスをテーマにするようになったかを話す。

戦後の日本語教育を概観すると、時代ごとに世間の注目を浴びる学習者のタイプが異なっている。

- 1期 50年代 学習者は限られ、研究者、学者、賠償留学生
- 2期 60—70年代 国費留学生、政府や大企業招致の技術研修生
- 3期 80年代 中国残留孤児、その家族、ベトナム・カンボジアからの難民
- 4期 90年代 私費留学生(就学生)、日系労働者、その家族
- 5期 2000年代 外国人労働者一般、その家族

この学習者の変容・多様化に応じて、話題となる日本語教育の内容も、1期は研究の日本語、2期は大学・職場の日本語、3期は社会生活適応の日本語、4期は年少者の

日本語、5期はバイリンガルとしての日本語が取り上げられるようになり、日本語教育の範囲も拡大し多様化していった。

こうした学習者や、その学習目的・内容の変化は、教育観や教育方法の変換をも促すことになる。それは、次の二つの対照的な教育観、教え方に反映し、集約される。

タイプ I

教師主導／クラス内活動重視／定型／文型積み上げ／モノリンガル／専門教育技術

タイプ II

学習者中心／クラス外活動重視／非定型／コミュニカティブ／バイリンガル／ボランティア

一見してわかるように、タイプIが、いわゆる旧来の教育方法を踏襲しているのに対し、タイプIIは、時代の趨勢と学習者の変化に合わせて力点を変えていることがわかる。したがって、タイプIIの方がより新しくより優れた教育方法らしくみえる。しかし実際は、タイプIも学習者のための教育を目指していることには変わりがない。両者の違いは、俗っぽく現代の学校教育に例えれば、「総合学習」を重視するか、それとも塾や中高一貫校的な教育を重視するかであり、ある意味では永遠に存在する教育観の対立である。両方の考えに優劣をつけるよりも、二つの対照的なものが昔からあると考える方が自然であり、現実的であろう。いずれにせよ、学習者があり、学習目標があって教育方法が選択される。その逆は、ない。

さて、これまで一貫して技術研修生や留学生を中心に教え、その中心はアジアであった。だから、学習者が日本語を習得して日本で学び、その成果を持って帰国するこ

とは、とりもなおさずアジアを初めとする発展途上国の独立発展に寄与することであると考え、そこに日本語教育の意義と価値をおいてきた。言い換えると、発展途上国からの学生が存在し、それ故に日本語教育が存在し、そして教育方法が選択されたのだが、今や時代は変化し、学習者とその価値観も多様となり、それぞれの学習動機や目的に合わせて日本語教育の普遍的な意味を考えるとということに限界を感じ始めた。その時にコメニウス（ヤン・アモス・コメンスキー。1592-1670）の著作に出会うことになった。

8年前、偶然に『大教授学』20章を読んだ。研修協会時代や日本語学校時代の教え方の手順と同じことが書かれていた。コメニウスの手法はタイプIの教授法と直感した。しかし、見方によってはタイプIIの思想であり、その創始者としても見做せることに興味が募った。コメニウスは教授法の本だけでなく、語学教科書を実際に書いていて実はその方が有名であった。いずれも、現場の語学教師でなければ書けないものと感じた。4世紀も前の現場の語学教師が、人類の歩むべき道を示す教育者・大思想家となったことに不思議な感動を覚えた。コメニウスをたどれば、教科書、教授法、語学教育、第2言語教育とは一体何のためなのか、外国人に対して日本語教育を行うことにはどんな意味があるのかが解明できると確信した。

コメニウスの著書は膨大であるが、この数年はコメニウスをその周辺から眺める作業をしている。コメニウスの教授法や教科書は文句なくすばらしいものであるが、これらは後の時代の人々に使ってもらえたのか、あるいは、内容と構成についてコメニ

ウスは自ら全てを考えついたのか、などへの疑問が生まれ、2004年夏にチェコの図書館（プラハ、ブルノ、オロモウツなど）に赴き、15世紀からのチェコ人のためのドイツ語辞書や教科書をみて、コメニウスへの影響、コメニウスからの影響を調べた。その中間報告を『一橋論叢』に載せた。

これからも大思想家コメニウスを、語学教育者としての面から考察し続けたい。コメニウスの思想をことさらに難しく、理屈っぽく考えたりすることはせず、コメニウスの考えたことはきわめて当たり前で、具体的で、だからこそ現代の語学教育にも無理なく当てはまること、ということは、コメニウスは我々に、言語教育の普遍的意味を提示したのだということを主張したい。これは畢竟、日本語を教えることの普遍的意味は何か、を問うことでもあるが、これについては、留学生センターの仲間と最近刊行した『開かれた日本語教育の扉』でも述べた。

第222回 2005年3月16日
「計量言語学の可能性について」

新井皓士

恒例による定年退職者の最終「語研談話」（2005.03.16）の機会を得、私は3つの事例を通じて言語研究における計量的方法、統計学の応用の可能性を探った。事例1は印欧語族の系統発生モデルに関する最近の研究動向の紹介であり、事例2は現在のヨーロッパ諸語（135語種）の基本的語順に関する国際共同研究を整理紹介したうえで、統計学的分析を試みたもの、事例3は日本語の起源や系統に関する仮説や臆説を検証

する一方法としての統計学の応用例である。言語・文学などの研究と統計学はおおよそ無縁、ないし感性上にわかには相容れない感がないわけではないが、研究の場における一方的・主観的断定を避け、また非母語話者として異言語作品をその母語話者研究者と対等の場に立ち論議できる方法を模索する過程で、「統計学は定量的推論の科学であり、応用哲学である」とする思想に出遭ったこと、コンピュータや情報科学の急激な発展という時代状況に直面したことが、最終講義（01.26）において『ゲーテとホフマン——文体統計学の視点から』を、最終談話において『計量言語学の可能性について』というテーマを選ばせることとなった。伝統的学会組織からはとりでもないケモノでもない避けられ、「ハマチャッタね」と揶揄もされる世界に足をふみいれた、気ばかり若い遍歴者＝試行錯誤者のあわただしい発表をあたたく聴いて下さった方々にまずは心から感謝申し上げたい。

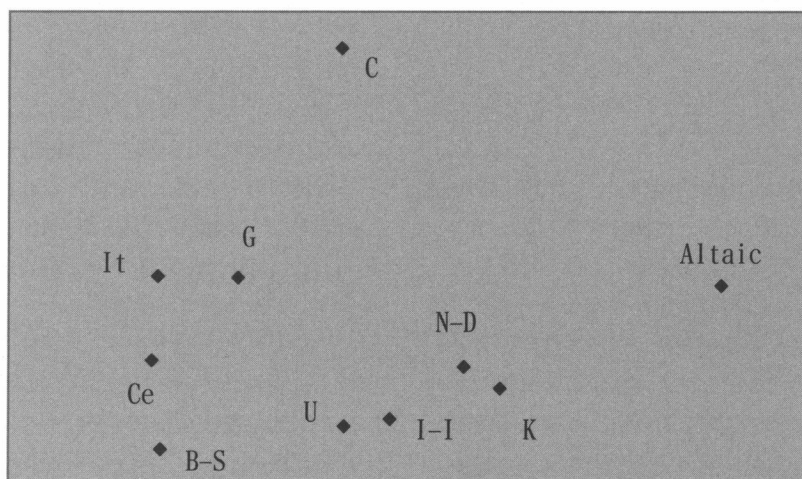
事例1と事例2はヨーロッパの言語に関し、語と文法の両面から諸語の系統関係を検討する。また事例1と事例3は、1960年代前後に注目を浴びたが、その後言語学関係者からはあまり重視されなくなった感のある、スワデシュ提唱の「基礎語彙」をいわば再利用する統計学的試みである。

事例1「印欧語族の系統樹」は『ネイチャー』誌（Vol. 426: 27. Nov. 2003）にオーストラリア大学のグレイとアトキンソンの連名で発表されたもので、インターネット上にも公表されている印欧語約90種の基礎語彙に独自資料も加えたデータベースに、ベイズ型マルコフ連鎖モンテカルロ法を適用したコンピュータ・シミュレーションの結果、印欧語族の発生に関してはいわゆる

数量化Ⅲ類のためのダミー変数行列							
語族・語派	SVO>SOV	NR>RN	AV>VA	prep>post	DefN>(0)N	IndefN>(0)	GN>NG
Altaic	0	0	0	0	0	0	1
Na-Daghes	1	0	0	0	0	0	1
NW-Caucas	0	0	0	0	1	1	1
Kartvelian	0	0	1	0	0	0	1
Balto-Slav.	1	1	1	1	0	0	0
Celtic	1	1	1	1	1	0	0
Germanic	1	1	1	1	1	1	1
Indo-Iranic	0	1	1	0	0	0	1
Italic	1	1	1	1	1	1	0
Uralic	1	1	1	0	0	0	1

語族・語派	個体数量1	個体数量2	個体数量3	カテゴリー数量	
Altaic	3.316	0.393	0.566	SVO>SOV	-0.306 -0.594
Na-Daghes	1.396	-0.378	3.278	NR>RN	-0.462 -0.755
NW-Caucas	0.485	2.653	-0.262	AV>VA	0.012 -0.808
Kartvelian	1.668	-0.584	-1.650	prep>post	-1.272 -0.253
Balto-Slav.	-0.867	-1.164	0.248	DefN>(0)N	-0.694 1.591
Celtic	-0.931	-0.317	0.113	IndefN>(0)	-0.394 2.325
Germanic	-0.288	0.472	0.029	GN>NG	1.938 0.203
Indo-Iranic	0.848	-0.876	-1.737		
Italic	-0.888	0.485	-0.060		
Uralic	0.506	-0.944	0.195		

数量化Ⅲ類による語族・語派の相互位置



クルガン仮説よりアナトリア仮説を有利とし、時間的にはこれまで想定されてきたものより古く約9千年前とみられる、という結論に至っている。系統樹上のヒッタイト語、トカラ語、アルメニア語などをはじめ他の印欧諸語の位置付けは定説と齟齬することなく、研究蓄積の豊富な印欧語族を対象とする好条件はあるが、方法論上たいへん興味ある刺激的研究成果である。なお関連して、ノアの洪水の記憶原型ともみなされる黒海氾濫仮説も紹介した。

事例2は、文の基礎要素11項について、現在ヨーロッパで使用されている135語を統辞論的見地から共同調査した結果報告書をデータとして利用した。11項とは、(1)主語・目的語・動詞の位置関係、(2)名詞の修飾に関係節をとるか連体修飾句をとるか、(3)助動詞と動詞の位置関係、(4)前置詞か後置詞か、という文に関する項目と、(5)(6)名詞と定冠詞・不定冠詞の位置および有無、(7)(8)(9)名詞と指示詞・数詞・形容詞の位置関係、(10)(11)名詞所有格および代名詞所有格と(被修飾)名詞の位置関係であり、むろん例外ないし不定要素もあるが基本形を重視し、例外などを注記する詳細な記録である。135語は大きくは9語族(phyla)にわけられ、そのうち最大の印欧語族は更にバルト・スラブ語派、ゲルマン語派、インド・イラン語派、イタリア語派、ケルト語などに分けられている。もちろん印欧語族が(使用人口ばかりでなく)語種でも圧倒的に多いので、他の語族を合併して印欧語族とくらべてみると、調査11項目のうち7, 8, 9と11は印欧語族と他の語族のあいだに大差はないが、その他の項目はまったく対称的な比率となっている。つぎに印欧語の主だった語派と他

の主だった語族について、それぞれの群において各項ごとにいずれのタイプが主流か調べ、1と0によるダミー変数行列(たとえば、SVOが主なら1, SOVが主なら0を与える)をつくって、カテゴリーデータの分析に利用される数量化Ⅲ類の手法で分析し結果を図示してみた。アルタイ語族が他と懸け離れた位置にあり、イタリア語派やゲルマン語派が相対的に近いなど、10行7列の見かけは簡単な行列ながら簡明で納得のいく結果がえられた。しかし、より肝要なことは個々の主観的解釈に左右されることなく、同じデータ、同じ方法を用いれば誰が実験しても同じ結果がえられる、いいかえれば追試可能性であり、人文の学における「果てしなき議論」を避けるためには、ときにはこのような方法が有効かと思われる。(図)

事例3は、大野晋氏の「弥生日本語＝タミール語クレオール」説の一検証方法として、PY法(くボリア・安本)と私が仮称する確率統計論的方法の適用であり、基礎語彙を利用するPY法自体の有効性を印欧諸語にあてはめて再検証することも含んでいた。時間の関係もあり詳しく説明することはできなかったが、この検証方法によるかぎり大野説は成立しがたい、という結論は、より不十分なデータではあったが以前にも別の機会で述べたし、この方法も客観的追試可能性を有することはいうまでもない。